

I類とII類の動詞の区別とテ形の作り方(下ではIII類動詞<する・来る>は無条件に覚えることが前提である)

	テ形	辞書形 (-u)	語幹	ナイ形 (-A-nai)	テ形 (夕型)	各グループに属する動詞
I類動詞 (五段活用)	「う・つゝる」↓「って」	歌 <u>う</u>	歌 uta·w-	歌 <u>わ</u> ない wA	歌 <u>っ</u> て (歌 <u>っ</u> た)	笑 <u>う</u> 違 <u>う</u> 会 <u>う</u> 習 <u>う</u> 吸 <u>う</u> 言 <u>う</u> 思 <u>う</u> もら <u>う</u> 手伝 <u>う</u> 使 <u>う</u> 払 <u>う</u> 洗 <u>う</u> 願 <u>う</u> 買 <u>う</u>
		持 <u>つ</u>	持 mo·t-	持 <u>た</u> ない tA	持 <u>っ</u> て (持 <u>っ</u> た)	立 <u>つ</u> 勝 <u>つ</u> 待 <u>つ</u>
		作 <u>る</u>	作 tuku·r-	作 <u>ら</u> ない rA	作 <u>っ</u> て (作 <u>っ</u> た)	は <u>し</u> る <u>し</u> る <u>き</u> る <u>はい</u> る <u>お</u> ちる <u>かえ</u> る hasiru siru kiru hairu tiru kaeru 終 <u>わ</u> る 残 <u>る</u> 分 <u>か</u> る 登 <u>る</u> 起 <u>こ</u> る 乗 <u>る</u> 光 <u>る</u> 移 <u>る</u> 渡 <u>る</u> 座 <u>る</u> 売 <u>る</u> 怒 <u>る</u> 送 <u>る</u> 亡 <u>く</u> なる 見 <u>つ</u> かる 泊 <u>ま</u> る 触 <u>る</u> 降 <u>る</u> 頑 <u>ば</u> る 取 <u>る</u> 実 <u>る</u> 止 <u>ま</u> る 買 <u>う</u> 踊 <u>る</u> 閉 <u>ま</u> る
	むぶぬ↓んで	読 <u>む</u>	読 yo·m-	読 <u>ま</u> ない mA	読 <u>ん</u> で (読 <u>ん</u> だ)	たの <u>し</u> む やす <u>む</u> たの <u>し</u> む ふ <u>む</u> す <u>む</u> の <u>む</u> 頼 <u>む</u> 休 <u>む</u> 楽 <u>し</u> む 踏 <u>む</u> 住 <u>む</u> 飲 <u>む</u>
		遊 <u>ぶ</u>	遊 aso·b-	遊 <u>ば</u> ない bA	遊 <u>ん</u> で (遊 <u>ん</u> だ)	選 <u>ぶ</u> 飛 <u>ぶ</u> 呼 <u>ぶ</u>
		死 <u>ぬ</u>	死 si·n-	死 <u>な</u> ない nA	死 <u>ん</u> で (死 <u>ん</u> だ)	
	くぐ↓いで	聞 <u>く</u>	聞 ki·k-	聞 <u>か</u> ない kA	聞 <u>い</u> て (聞 <u>い</u> て)	引 <u>く</u> 働 <u>く</u> 書 <u>く</u> 置 <u>く</u> は <u>く</u> 動 <u>く</u> 歩 <u>く</u> 着 <u>く</u> 解 <u>く</u> 弾 <u>く</u> 開 <u>く</u> 空 <u>く</u> 鳴 <u>く</u> 泣 <u>く</u> 除 <u>く</u>
		泳 <u>ぐ</u>	泳 oyo·g-	泳 <u>が</u> ない gA	泳 <u>い</u> で (泳 <u>い</u> だ)	嗅 <u>ぐ</u> 脱 <u>ぐ</u> 継 <u>ぐ</u> 急 <u>ぐ</u>
		(例外) 行 <u>く</u>	行 i·k-	行 <u>か</u> ない kA	行 <u>っ</u> て (行 <u>っ</u> た)	
	ま→「して」	話 <u>す</u>	話 hana·s-	話 <u>さ</u> ない sA	話 <u>し</u> て (話 <u>し</u> て)	壊 <u>す</u> 出 <u>す</u> 定 <u>す</u> 消 <u>す</u> 押 <u>す</u> 無 <u>く</u> す 返 <u>す</u> 置 <u>す</u> 回 <u>す</u> 貸 <u>す</u> 写 <u>す</u> こぼ <u>す</u>
II類 (一段活用)	辞書形 (-ru)	語幹	ナイ形 (-nai)	テ形 (夕型)	各グループに属する動詞	
	起 <u>きる</u>	起 <u>き</u> ok I-	起 <u>き</u> ない	起 <u>き</u> て (起 <u>き</u> た)	見 <u>る</u> 借 <u>り</u> る 浴 <u>び</u> る 過 <u>ぎ</u> る いる 降 <u>り</u> る 着 <u>る</u> 足 <u>り</u> る 落 <u>ち</u> る 出 <u>来</u> る	
	食 <u>べる</u>	食 <u>べ</u> tab E-	食 <u>べ</u> ない	食 <u>べ</u> て (食 <u>べ</u> た)	見 <u>せ</u> る 見 <u>え</u> る 聞 <u>こ</u> える 寝 <u>る</u> 始 <u>め</u> る あ <u>げ</u> る 教 <u>え</u> る かけ <u>る</u> 迎 <u>え</u> る 疲 <u>れ</u> る 出 <u>る</u> つけ <u>る</u> 開 <u>け</u> る 閉 <u>め</u> る 止 <u>め</u> る 入 <u>れ</u> る 辞 <u>め</u> る 集 <u>め</u> る 捨 <u>て</u> る	
III類	する 来(く)る		して 来(き)て			

第一段階（1類と2類の動詞の区別）

1年生	「る」以外で終わるのは1類動詞。「る」で終わる動詞のうち、「る」の前がIかEとなるものは2類動詞である。つまり、2類動詞——起きる(okiru)、食べる(taberu)のように。 しかし、「る」で終わる1類動詞でも、「る」の前がIかEとなる以下の例外がある。 1類動詞——走る(hasiru) 知る(siru) 切る(kiru) 入る(hairu) 散る(tiru) 帰る(kaeru)。 これらだけは、2類動詞と区別するために覚えておかなければならない（そのテ形は「走って、知って、切って、入って、散って、帰って」となる）。
2年生	ナイ形を言う。ナイの前がA(ア段)なら1類動詞、I(イ段)かE(エ段)なら2類の動詞。

第二段階（テ形をつくる）

1類動詞は「うつる——>って むぶぬ——>んで くぐ——>いて(で) す——>して」で、テ形をつくる。
2類動詞は、「る」の代わりに「て」でテ形ができる（簡単）。

<第一段階>

<第二段階>

I、II、III類動詞の語尾からの分類

う つ む ぶ ぬ く ぐ す	う つ む ぶ ぬ く ぐ す	う つ む ぶ ぬ く ぐ す 歌う ←例 持つ 読む 遊ぶ 死ぬ 聞く 泳ぐ 話す
る	る	る 作る
るの前が IかE		
する・来る III類動詞		

I類動詞

II類動詞

III類動詞

例外 (走る 知る 切る 入る 散る 帰る)

I類動詞

II類動詞

III類動詞

ナイ形の前がA

ナイ形の前IかE

I、II、III類動詞のテ形

歌う 持つ 作る	うつる ↓ って	歌って 持つて 作って
読む 遊ぶ 死ぬ	むぶぬ ↓ んで	読んで 遊んで 死んで
聞く 泳ぐ	くぐ ↓ いて(で)	聞いて 泳いで
話す	す→して	話して
II類 起きる 食べる	る→て	起きて 食べて
III類 する 来る	る→て	して 来て

↑一年生への教え方

二年生への教え方↑

- 第一段階の教え方で、1、2年生を区別するのは、日本語に不慣れな1年生は「ナイ」形を作るのがまだ難しいとの考えによるものである。「精読授業」を担当する中国人教師はこの教え方をしているようだ。しかし、会話授業を担当している私は1年生でも後期授業の段階では、ナイ形をどんどん言わせて、1類と2類の動詞の区別ができるように指導している。
- 1類動詞の4種類のテ形を覚えるのに、学生に「雪山賛歌」を歌って聴かせている。歌はなんでもいいが、「雪山賛歌」は親しみやすいので、学生は喜んで我が美声(?)に聞き惚れている。
- 授業でテ形の訓練を十分に行っておかないと、4年生になっても「見^って」のような間違えをする学生がいる。会話授業で、教師は学生の発音を注意深く聴いていないと「見て」と「見^って」の微妙な違いを聞き逃してしまう。行き届いた発音指導のためにも、会話授業は週に1回では不足で2回は是非とも必要だと考えている。

楊貴妃は美しい

● イ形容詞文、ナ形容詞文、名詞文、動詞文の活用語尾変化

品詞	肯定形		ナイ（否定）形	
	現在形	過去形	現在形（ない）	過去形（なかった）
イ形容詞 普通体 丁寧体	<楊貴妃は> ①美しい。 ②美しいです。	③美しかった。 ④美しかったです。 X美いでした。	<ようきひは> ①美しくない。 ②美しくないです。 ③美しくありません。	④美しくなかった。 ⑤美しくなかったです。 ⑥美しくありませんでした。
ナ形容詞 普通体 丁寧体	<この町は> ①静かだ。 ②静かです。	③静かだった。 ④静かでした。 X静かだったです。	<このまちは> ①静かじゃない。 ②静かじゃないです。 ③静かじゃありません。	④静かじゃなかった。 ⑤静かじゃなかったです。 ⑥静かじゃありませんでした。
名詞 普通体 丁寧体	<あの動物は> ①パンダだ。 ②パンダです。	③パンダだった。 ④パンダでした。 Xパンダだったです。	<あのどうぶつは> ①パンダじゃない。 ②パンダじゃないです。 ③パンダじゃありません。	④パンダじゃなかった。 ⑤パンダじゃなかったです。 ⑥パンダじゃありませんでした。
動詞 普通体 丁寧体	<私は> ①歌う。 ②歌います。	③歌った。 ④歌いました。 X歌ったです。	<わたしは> ①歌わない。 ②歌いません。 X歌わないです。(注)	③歌わなかった。 ④歌いませんでした。 X歌わなかったです。 X歌わないでした。

イ形容詞：形容詞 ナ形容詞：形容動詞 普通体：簡体 丁寧体：敬体 or 礼貌体

静かじゃない、パンダじゃない（会話体・口語体） <—> 静かで(は)ない、パンダで(は)ない（文章体・文語体）



注1 <ナイ形普通体> <ナイ形丁寧体>

イ形容詞文：美しくない——>美しくないです

ナ形容詞文：静かじゃない——>静かじゃないです

が許容されているので、この連想から、

動詞文：歌わない——> X歌わないです (○歌いません)

と間違える学生が多い（過去形も同様）。

しかも、困ったことに意味はよく分かるので、日本人教師でもつい聞き逃してしまう。さらに困ったことに、日本の大学に留学している教え子が言った。「日本人でも、『歌わないです』や『歌わなかったです』と平気で言っている人がいますよ」と。外国人からそう言われると、日本語教師は困ってしまう。類似の問題は『う抜き言葉』でもそうだ（もっとも私が生まれ育った北海道など日本各地でう抜き言葉が正統な方言として通用している）。しかし、外国人初学者に文法を教えるときには、やはり基本を教えることが大切である。

注2 会話の授業でなぜこのような「文法」を教えなければならないのか——と疑問に思う方がいるかもしれない。なるほど、このような文法は中国人教師が「精読授業」で既に教えているのだ。しかし、頭に入っている知識が、口からスムーズに出てくるのが自由会話で是非とも必要である。だから、私は上の表の38個の活用表を『楊貴妃は美しい』と名付けて、徹底的に学生に暗唱させている。この活用表の中には「美しかった」「静かじゃ

なかった」のように、中国人学生にとって難しい『促音便』を正しく発音する訓練にもなっている。

学生と私の合い言葉となっている『楊貴妃は美しい』は、次のような学生の誤りに気づかせるときにも有効である（M：森野 R：劉）。

M：「劉さん、昨日はどこかへ行きましたか？」

R：「はい、市内に友達と遊びに行きました」

M：「お昼に何を食べましたか？」

R：「餃子をたべました。でも、野菜餃子はあまりおいしくないでした」

M：「えっ、“おいしくないでした”？」

R：「・・・？」

M：「『楊貴妃は美しい』のイ形容詞文を教えてください！ まず、肯定形を」

R：「楊貴妃は美しい 楊貴妃は美しいです 楊貴妃は美しかった 楊貴妃は美しかったです」

M：「次に、否定形は？」

R：「楊貴妃は美しくない 楊貴妃は美しくないです 楊貴妃は美しくありません 楊貴妃は美しくなかった 楊貴妃は美しくなかったです・・・あっ、野菜餃子はあまりおいしくなかったです」（注3）

M：「OK！ あるいは、『野菜餃子はあまりおいしくありませんでした』でもいいね」

（注：「・・・なかったです」より「・・・ありませんでした」の方が丁寧度がより高い。また、「・・・ないです」「・・・なかったです」を連発すると、ちょっと幼稚な日本語になる。だから、上級者には両丁寧体を取り混ぜて話すように指導している）

といった具合で、学生が各品詞文を間違えたときには、すぐ『楊貴妃は美しい』を言わせて、間違いに気づかせるようにしている。作文授業でも同様である。

注3 日本の学校教育や公文書では「・・・、野菜餃子はあまりおいしくなかったです。」のように、カギ括弧を閉じる前に、句点（。）を付すのが正式であり、中国の日本語教育でもそれを踏襲している。わたしは、日本の新聞や小説の書き方に倣って、カギ括弧を閉じる前に句点（。）をつけない書式も3、4年生の高学年を対象にした作文の授業では日本の小説を見せて紹介している（ただし、学生に強要すべきことではないだろう）。学生の作文の中に、以下のような会話文が出てくることがある。

書き方A「えっ、本当？ 驚いた！ そう言われると困ってしまう」

書き方B「えっ、本当？驚いた！そう言われると困ってしまう」

このような場合にも、わたしは、日本の小説を学生に見せてAが正しいことを教えているが、Bの書き方が間違いであるとは言えない。そもそも、伝統的な日本語には外来語由来の「！」や「？」は無かったのだから。

あるとき、わたしは、エッセイを中国の雑誌に投稿したことがあった。原稿ではAのようにしたが、出版されるとBに変わっていたので、編集長に抗議した。すると、編集長（日本人）は「中国の出版社がいいかげんなので仕方がないのです。我慢してください」と言われた。

中国で出版されている日本語のテキストでも、Bのような書き方を時に見ることがある。一般の日本人はもとより日本人教師でもそのような原則を知らないのかも知れない。

日本語学習歴が4年未満の学生を対象としている作文授業では、日本語文法に適った文章指導が大切なので、上のような私の拘りは枝葉末節なのだろう。だから、私はBの書き方をしている学生の作文でも許容することになっている。